

周作クラブ会報

(第63号)
2016年6月20日発行



◆主な記事◆

第17回原京の旅	1・2面
文学セミナー	3面
長崎文学館便り	4・5面
「からだ」番記者レポート	7面
「夕映え作戦」の思い出	8・9面
町田市民文学館	10・11面
周作クラブ長崎	

報告——第17回遠藤周作原点の旅（5月21日〜22日）

『沈黙』の舞台長崎を訪ねて

1日目（5月21日）

羽田空港への集合は午前7時30分。家を出たのは6時。起床は5時30分である。夜型の筆者などには、かなりきつい時間だ。眠い目をこすりながら何とか7時30分ぎりぎりに羽田空港の集合場所に着くと、加賀乙彦会長以下、全員がすでにそろっていた。

長崎空港は、明るい初夏の陽光の中にあつた。ともあれ、貸し切りバスに、加賀会長・加藤宗哉・宮辺尚・高橋千劍破の三幹事以下、総勢で21名が集まり、東武トップアースの福田さんに率られて、長崎市外海町の「遠藤周作文学館」へと直行した。

約1時間後、文学館に併設されたレストランで、何はともあれ「ドロさま素麺」を食べた。文学館で私たちを出迎えてくれたのは、本木治文学館長ほか学芸員の方々、文学館設立に尽力さ

れた元外海町長の東満敏さん、沈黙の碑設立に奔走された周作クラブ長崎の大竹豊彦さんたち。



展示オープンセレモニーのテープカット

午後1時から、文学館のホールで、「遠藤周作没後20年、『沈黙』刊行から50年」記念の会が開催された。まずは長崎市長の挨拶があり、列席の方々の紹介があつた。テーブルカットの後、い

よいよ本日のメインである加賀会長の講演。演題は、「『沈黙』から『深い河』まで」。



『沈黙』について語る
加賀乙彦会長

遠藤周作のひとと文学について、多くの人はそれぞれに

知ってはいるが、加賀会長から見た遠藤周作は、興味深いものであつた。加賀会長は、遠藤周作を代父として受洗され、『高山右近』ほか、『沈黙』の世界と係わる文学作品を書いておられる。

また、最新作の『殉教者』は、ペトロ岐部カスイの生涯を描いた、書き下しの長編小説。

ペトロ岐部は、国東半島の豪族岐部氏の出身。父母ともにキリシタンで、天正15年（1587）に生まれ、洗礼名をペトロとされた。有馬のセミナーオで学び、やがて長崎からマニラを経てマカオへ渡り、さらにマラッカからインドのゴアへ。次いでホルムズ海峡から陸路を辿り、バグダッドを経由して聖地エルサレムの地を踏み、さらに、イスタンブールからヴェネチアへと歩を進め、ついにローマに至つた。

もつとも『殉教者』については、多くを語られなかった。『沈黙』を出発点とし、遠藤文学の集大成といえる『深い河』までを話されたが、1時間という時間しかなく、残念であつた。



『殉教者』にサインをする加賀乙彦会長

講演終了後、周作クラブ長崎のメンバーが中心となつたアマチュア合唱団「無鹿」による童謡のメドレー。童謡はいっ聞いても心が和む。なお「無鹿」は、今年で結成10年になるが、近々解散するという。結成時に、「活動は10年間」と決めてあつたのだという。惜しむ声も少なくないが、惜しまれて終わるのが、いいのかもしれない。

歌の後は、皆で企画展を見学し、長崎市へと向かつた。宿は、「ベスト・ウエスタン・プレミアムホテル長崎」。部屋でゆっくりする間もなく、午後6時から懇親会。東京からの20名に長崎組の20名が加わり、和やかで楽しい宴が続いた。東京他から行ったメンバーの約半数が、1年以内に入会した新入会員であつたが、会が進むにつれ、旧知のごとく話はずみ、閉会後も多くが2次会へと…。(次ページに続く)